

シュッツのレリヴァンス概念の看護研究上の活用方法論

Alfred Schutz's concept of "relevance" in nursing research: a methodological study

山中恵利子（藍野大学医療保健学部 講師 / 立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）

松田亮三（立命館大学産業社会学部 教授）

看護師の心に残っている体験、一度振り返って整理しなければならない看護体験を看護師の方々に語ってもらい、「その語り」のなかから看護の知を引き出していく上で、アルフレッド・シュッツのレリヴァンス概念がどのように有用かを検討することが本研究の目的である。このため、ベナー看護論に示される現象学的存在論、グランデッドセオリー、エスノメソドロジー、という看護分野において用いられている三つの研究手法と、レリヴァンス概念を焦点とする現象学的社会学のアプローチとの対比を行う。それらのアプローチにどのような類似点と差異点があり、看護体験談の分析にどのように貢献することが期待できるのか、またはできないのか、つまりそれぞれのアプローチの特徴について検討する。本報告では、其々の研究手法が〈言葉の位置づけ一言語の発生〉をどのように認識しているのかという視点に焦点をあてて見ていきたい。

（2013年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択
「対人援助におけるエビデンス-実践回路研究」）